

〈原著論文〉

読書行動を支える認知的メカニズム

——帰属複雑性の役割——

Cognitive Mechanism Underlying Reading Behavior : The Roles of Attributional Complexity

力久由香里 諸井克英*
(Yukari RIKIHISA) (Katsuhide MOROI)

Abstract : The purpose of the present study was to examine cognitive mechanism underlying reading behavior. Female undergraduates ($N = 334$) were asked to estimate frequencies of reading various books (63 items) for the last half year. Also, they rated the attributional complexity scale (Fletcher *et al.*, 1986 ; Moroi, 2000). The principal component analysis (with promax rotations) of reading behavior yielded seven components. Those component scores were significantly correlated with attributional complexity scores. The significance of this research was discussed from the point of view of aversion to reading.

Key words : reading, attributional complexity, aversion to reading

I. 問題

読書に関する全国調査によると(毎日新聞社, 2011; 満16歳以上), 書籍か雑誌のいずれかを「読む」者の割合は, '00年と'01年には8割以上に達したが(84%, 87%), その後で7割代に戻った('10年73%; '90年74%)。'08年に衆議院・参議院において全会一致で「国民読書年に関する決議」採択された。両院で若干表現が異なるが, 決議は次のような構成になっている。「文字・活字は, 人類が生み出した文明の根源をなす崇高な資産」であるが, 「我が国においては近年, 年齢や性別, 職業等を越えて活字離れ, 読書離れが進み」, 「我が国の精神文明の変質と社会の劣化」が危惧され, '10年を「国民読書年」とし「国をあげてあらゆる努力を重ねる」ことが宣言される (http://www.mojikatsuji.or.jp/link_5dokushonen2010.html)。この決議の精神を具体化するため

に, 「国民読書年推進会議」が設置された。

出版業界の状況を見ると(全国出版協会・出版科学研究所, 2011), 「出版業界2兆円割れ」と話題になった'09年よりも, '10年においては出版物(書籍・雑誌)の推定販売金額, 推定販売部数ともにさらに減少している。つまり, 「読書離れ」の進行は, 上記のような「政治」的運動によってくい止めることができるようなものではなく, 読書という「文字・活字」に依存した行動を支える心理的メカニズムの解明と連動すべきである。コミュニケーション・メディアの多様化の中で従来の読書行動が衰退しているのか, あるいは読書行動を支える心理的メカニズム自体の変容が生じているのか, 種々の原因が考えられるからである。本研究では, 読書行動を支える認知的メカニズムの解明に着手し, 「読書離れ」現象の原因の一端を明らかにしたい。

秋田(1997)によれば, 読書に関する心理学的研究は, 第2次大戦後から取り組まれ, 次の4領域に大別できる。①読書行為を動機づける読書興味・関心, ②読字・語彙・文法などの理解に必要な言語知識・能力, ③読解

同志社女子大学大学院生活科学研究科
生活デザイン専攻

*同志社女子大学生生活科学部

・鑑賞・情報の収集検索などの理解に必要な知識や能力、④読書を親しむ習慣態度。小・中・高生を対象とした読書調査では(毎日新聞社, 2011), 1ヵ月間の読書量(教科書, マンガ, 雑誌などを除く)の微増傾向が認められるが, 「多読児童」の増加が指摘されている。つまり, 読書接触に関する極化現象が生じているのである。この基底には, 先の①に関する個人差の分化が考えられる。そこで, 本研究では読書行動を帰属の観点から把握することを試み, 読書行動を理解する認知的メカニズムの枠組みを構築する。これは, 「読書離れ」現象の理解と対処に役立つだろう。

Heider (1958) が提唱した素朴心理学に基づくと, 人は, 自分が日常的に経験した出来事の原因を探索することによって, 自分が住んでいる世界を秩序ある仕方でも理的に構成しようとする。このように, 特定出来事の原因を探索することを帰属と呼ぶ。この帰属過程に関する研究は, Heider (1958) の素朴心理学の提唱に由来する。

Fletcher, Danilovics, Fernandez, Peterson, & Reeder (1986) は, 出来事の原因を単純に考えるか複雑に考えるかについての個人差があることを指摘し, そのような個人差を測る帰属複雑性尺度を作成した。Fletcher *et al.* は, 次の7側面を仮定した。①人間行動を説明し理解するための高水準の内発的動機づけをもち, 人間行動の理由に対して好奇心や関心を抱いているかどうか(動機づけ)。②原因を考える際により多くの原因を思い浮かべるかどうか(複雑な説明に対する選好)。③原因帰属に関与する基底的過程について考えるかどうか(メタ認知)。④他者が自分自身の行動におよぼす影響や自分自身の行動が他者の行動におよぼす影響の両方によって当該の社会的状況を考えるかどうか(相互作用の関数としての行動)。⑤抽象的な心理構造に言及し, 複雑な因果連鎖を推測するかどうか(複雑な内的説明)。⑥当該の人物から空間的および時間的に拡大された外的原因を考えるかどうか(複雑で同時的な外的説明)。⑦遠隔の原因からの連鎖を仮定するかどうか(時間的次元の使用)。この尺度は28項目から構成され, 単次元尺度として扱われている(尺度信頼性 $\alpha = .85$; 再検査相関係数<18日間隔> $r = .80$)。

本研究では, Fletcher *et al.* (1986) によって提起された帰属複雑性が書籍に対する接触パターンに影響すると仮定した。つまり, 日常的に複雑な原因帰属を営む傾向が高い者は, 単純な枠組みや筋書きから構成されている書籍を好まず, 複雑な原因同定を行わないと理解ができ

ないような書籍(例えば, 小説や専門書)に惹かれる。逆に, 単純な帰属志向性をもつ者は, 原因帰属努力をあまり必要としない書籍を選ぶはずである。

仮説: 帰属複雑性における個人差は, 書籍に対する接触パターンに影響するだろう。

この仮説を検討するために, 女子大学生を対象とする質問紙調査を実施した。

II. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して, 質問紙調査を2年度に渡って実施した(2010年7月12日/2011年4月21日; 回答者は重複していない)。回答にあたっては匿名性を保証した。また, 質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。

青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き, 各尺度に完全回答した女子学生334名を分析対象とした(2010年度187名, 2011年度147名/2年生65名, 3年生243名, 4年生26名)。回答者の平均年齢は20.15歳($SD = .76$, 19~23歳)であった。

質問紙の構成

質問紙は, 回答者の基本属性に加え, ①帰属複雑性傾向尺度と②書籍接触傾向尺度から構成されている。

(1) 帰属複雑性尺度

回答者が日ごろどのような仕方でも出来事の原因を探索しているかを測定するために, 帰属複雑性尺度を用いた。Fletcher *et al.* (1986) によって提起された7つの側面を想定しており(動機づけ, 複雑な説明に対する選好, メタ認知, 相互作用の関数としての行動, 複雑な内的説明, 複雑で同時的な外的説明, 時間的次元の使用), 各側面に対して4項目が設けられている。

本研究では, 諸井(2000)が和訳した尺度を利用した。28項目それぞれについて, 「ここ6ヵ月」を基準として, 4点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

(2) 書籍接触傾向尺度

回答者が日ごろどのような書籍に接触しているかを調べるために, 大手書店の書籍分類などを参考にして, 独自に63項目を作成した(Table 2-a, Appendix 1参照)。

この6ヵ月の間にそれぞれの種類の本や雑誌を回答者がどのくらい読んだかを尋ねた(買ったときと同じくらい読んでいるときには「立ち読み」も含めるように指示)。各項目について, 4点尺度で回答させた(「4. ひ

んばんに読んだ」, 「3. とときどき読んだ」, 「2. あまり読まなかった」, 「1. まったく読まなかった」。

Ⅲ. 結果

尺度の検討

帰属複雑性尺度については、以下の手順で主成分分析を行った。すべての尺度項目について、平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD > .60$) のチェックを行い、不適切な項目を除去した。書籍接触傾向尺度では、予備的に項目水準の検討をすると、大半の項目が平均値が低かったので (つまり、回答者によって購読雑誌がかなり分散している)、標準偏差値 ($SD > .60$) の基準のみを設けた。

項目水準で適切であった項目を対象として、尺度の主

成分構造を同定するために、主成分分析 (プロマックス回転 ($k=3$)) を行った。主成分固有値 ≥ 1.00 を満たす解をすべて求め、プロマックス回転後の負荷量 $|.40|$ を基準に妥当な主成分解を同定した。①特定主成分の負荷量が十分に大きく ($\geq|.40|$)、②他主成分への負荷が小さい ($<|.40|$) という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで、このことを反復した。最終的には、各分析で回帰法によって主成分得点を算出し、これらの得点を後の分析で用いた。

(1) 帰属複雑性尺度

1項目の標準偏差値が低く ($SD = .56$; 「ac_d_3 私は、自分自身の行動に対して自分が考えた理由が他のそれかと異なると、私の説明をもたらした自分の考えの進みぐあいにしばしば注意をむける。」)、残りの27項目を

Table 1 帰属複雑性尺度に関する主成分分析 (プロマックス回転 ($k=3$)) の結果—回転後の主成分負荷量—

		当該主成分負荷量
〔Ⅰ. 複雑な説明選好〕		
ac_d_6	私は、社会が私の行動や性格に与える影響についていろいろと考える。	.72 ⑥
ac_b_5	私がかかっているところでは、人の性格や行動を理解するために、その人の態度、信念や人格特徴がどのようにひとまとまりになっているかを知ることが重要である。	.63 ⑤
ac_c_6	私は、社会が他の人たちに与える影響について、いろいろと考える。	.63 ⑥
ac_b_7	私は、人の行動の基本的な原因がずっと過去にさかのぼったところにあることに、しばしば気づく。	.61 ⑦
ac_c_7	私は、人の行動を分析すると、原因が時には何年も過去にさかのぼり原因のいくつかが連鎖していることに、しばしば気づく。	.58 ⑦
ac_c_5	私は、自分の性格の異なる側面が相互に影響をおよぼし合う仕方 (例: 信念が態度に影響を与える、態度が人格特徴に影響を与える) について、いろいろと考える。	.56 ⑤
ac_b_3	私は、人について判断したり行動の原因を見つけるときの自分の考えの進みぐあいを理解することに、ひじょうに興味がある。	.44 ③
〔Ⅱ. 帰属動機づけの欠如〕		
ac_a_1	私は、ふつう、わざわざ人の行動を分析したり説明することはしない。	.72 ①
ac_a_2	私は、だれかの行動について一つの原因をつきとめると、ふつうはさらに原因を探そうとはしない。	.72 ①
ac_a_6	私は、まったく奇妙で異常な仕方で行動している人を見かけると、その人が奇妙で異常な人間だとするだけで、さらにそのことについて、わざわざ説明することはしない。	.59 ①
ac_c_1	私は、人の行動の理由や原因を分析することが本当に好きである。	-.58 ①
ac_d_2	私は、人の行動について、複雑なものよりも単純な説明を好む。	.50 ①
〔Ⅲ. 単純な説明選好〕		
ac_a_5	私は、人の態度、信念や人格特徴の間の関係がごく単純なものであると思う。	.64 ②
ac_b_6	私は、だれかの行動を説明しようとするときに、その人にだけ目をうばわれ、行動に影響しているかもしれないまわりのすべての原因に、あまり気をとめない。	.56 ②
ac_c_4	私は、他の人たちが自分の行動に与える影響についてほとんど考えない。	.55 ④
ac_c_3	私は、人の行動の理解や説明のための自分の考えの進みぐあいに、ほとんど注意を払わない。	.54 ③
ac_b_2	私は、人の行動の原因が単純というよりもむしろ複雑であることを、知っている。	-.48 ②
		II III
	〔主成分間相関〕	I -.32 -.23 II .26

N = 334

初期固有値 > 1.26

初期説明率 43.54%

[Fletcher et al. (1986) の分類基準] ①動機づけ、②複雑な説明に対する選好、③メタ認知、④相互作用の関数としての行動、⑤複雑な内的説明、⑥複雑で同時的な外的説明、⑦時間的次元の使用

対象に主成分分析を実施した。2~8 主成分分解が可能であったが、抽出主成分が解釈可能で同一主成分への負荷が比較的確確であった 3 主成分分解を採用した (Table 1)。

第 I 主成分と第 III 主成分は、原因を探索する際の説明の複雑さと単純さのどちらを好するかで分離している。それぞれ「複雑な説明選好」、「単純な説明選好」と名づけた。第 II 主成分には、原因探索への動機づけに関する項目の負荷が高かったため、これは「帰属動機づけの欠如」とした。

(2) 書籍接触傾向尺度

標準偏差値が低かった 9 項目を除き残りの 54 項目について主成分分析を行った。2~14 主成分分解が可能であった。解釈可能性が高い 7 主成分分解を採用した。しかし、負荷量の基準では明確な解が得られたが、主成分構成項目を点検したところ、構成項目が曖昧な主成分が見られた。曖昧な書籍項目を除去して、分析を反復したところ、明確に解釈できる解に到達した (Table 2-a)。各主成分で負荷の高い書籍項目の内容から、それぞれ「一

般マンガ・コミック」、「小説」、「情報誌」、「特殊マンガ・コミック」、「実用書」、「マニュアル」、「人文書」と命名した。

これらの 7 つの主成分得点を対象に 2 次主成分分析を試みた。固有値 > 1.00 を基準にしたところ、2 主成分が

Table 2-b 書籍接触傾向主成分得点に関する 2 次主成分分析 (プロマックス回転 $k=3$) の結果—回転後の主成分負荷量—

	I	II
一般マンガ・コミック	0.81	-0.27
特殊マンガ・コミック	0.69	0.09
小説	0.69	0.08
情報誌	0.49	0.23
人文書	0.42	0.17
マニュアル	0.03	0.77
実用書	0.06	0.75
[主成分間相関] I		0.19

N = 334

初期固有値 > 1.12 ; 初期説明率 48.56%

Table 2-a 書籍接触傾向尺度に関する主成分分析 (プロマックス回転 $k=3$) の再分析結果—回転後の主成分負荷量—

	当該主成分負荷量	当該主成分負荷量							
[I. 一般マンガ・コミック]		[IV. 特殊マンガ・コミック]							
book_e_3 恋愛マンガ・コミック (単行本)	.84	book_d_6 歴史・時代劇マンガ・コミック (単行本)	.76						
book_f_2 ギャグ・コメディ系マンガ・コミック (単行本)	.77	book_b_5 アクション・怪奇マンガ・コミック (単行本)	.67						
book_e_1 女性向けマンガ雑誌 (『デザート』、『別冊フレンド』など)	.71	book_c_9 ロボット・SF マンガ・コミック (単行本)	.67						
book_a_1 学園マンガ・コミック (単行本)	.69	[V. 実用書]							
book_g_1 ホビー関連マンガ・コミック (単行本)	.57	book_a_4 生活実用書 (料理・手芸・インテリアなど)	.87						
book_f_5 少年向けマンガ雑誌 (『週刊少年ジャンプ』、『週刊少年サンデー』など)	.53	book_d_3 ライフスタイル雑誌 (料理・手芸・インテリアを含む:『フラウ』、『日経 WOMAN』など)	.78						
book_c_2 スポーツマンガ・コミック (単行本)	.49	book_e_2 建築・住宅雑誌 (『r'home』、『住まい 100 選』など)	.67						
book_d_4 少女向けマンガ雑誌 (りぼん』、『LaLa』など)	.45	book_d_9 趣味実用書 (旅行・バイク・車・囲碁など)	.47						
[II. 小説]		[VI. マニュアル]							
book_a_9 ミステリー小説 (単行本)	.79	book_a_3 経済・ビジネスに関する専門書	.76						
book_c_3 ホラー小説 (単行本)	.64	book_a_10 社会・政治・時事に関する専門書	.69						
book_a_2 文学小説 (単行本)	.62	book_b_7 資格・就職のためのテキスト	.57						
book_b_6 SF 小説 (単行本)	.61	book_g_2 コンピュータ・情報科学に関する専門書	.44						
book_f_3 ノンフィクション小説 (単行本)	.57	[VII. 人文書]							
book_c_10 ファンタジー小説 (単行本)	.53	book_e_5 歴史・地理・民族に関する専門書	.72						
[III. 情報誌]		book_g_4 読書・本に関する専門書 (本の紹介・速読術・書評・著作権など)	.60						
book_b_9 写真週刊誌 (『フライデー』、『フラッシュ』など)	.83	book_e_10 哲学・心理・宗教に関する専門書	.58						
book_a_6 女性週刊誌 (『女性自身』、『週刊女性』など)	.82	book_f_7 神話・伝承小説 (単行本)	.44						
book_b_2 一般週刊誌 (『週刊朝日』、『週刊ポスト』など)	.66								
book_a_7 テレビ・エンターテインメント情報雑誌 (『サテリジョン』、『日経エンタテインメント!』など)	.56								
book_b_4 住宅・賃貸情報雑誌 (『CHINTAI』、『アバマンシヨップ』)	.44								
		II	III	IV	V	VI	VII		
		[主成分間相関]	I	.38	.26	.34	.06	.17	.18
			II		.26	.35	.20	.05	.19
			III			.26	.19	.18	.12
			IV				.17	.19	.28
			V					.26	.14
			VI						.14

N = 334

初期固有値 > 1.24 ; 初期説明率 55.28%

現れた (Table 2-b)。第Ⅰ主成分には物語性のある書籍、第Ⅱ主成分には実生活で直接役立つ書籍の負荷が高かった。

帰属複雑性と書籍接触傾向の関連

書籍接触傾向におよぼす帰属複雑性の影響を探るために、①ピアソン相関分析、②重回帰分析、および③分散構造分析を行った。重回帰分析 (ステップワイズ法) では、説明変数を帰属複雑性3主成分得点、書籍接触傾向主成分得点を従属変数とした。

①と②の結果を Table 3-a と Table 3-b に示す。一般

Table 3-a 書籍接触傾向と帰属複雑性との関係—主成分得点間のピアソン相関—

	[帰属複雑性]		
	複雑な説明選好	帰属動機づけの欠如	単純な説明選好
[書籍接触傾向]			
一般マンガ・コミック	.00	-.05	-.06
小説	.05	-.06	-.20 a
情報誌	.08	-.01	.03
特殊マンガ・コミック	.10	-.13 c	-.08
実用書	.15 b	-.08	-.20 a
マニュアル	.20 a	-.08	-.13 c
人文書	.16 b	-.23 a	-.12 c

N = 334

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

マンガ・コミックと情報誌が帰属複雑性と関係がなく、その他の書籍接触に対する帰属複雑性3側面の弁別的影响を窺うことができた。相関分析や重回帰分析の結果に基づき因果モデルを作成し、観測変数の構造方程式 (Amos 7.0; 最尤推定法; 豊田, 1998) の分析を試み

Table 3-b 書籍接触傾向と帰属複雑性との関係—重回帰分析 (ステップワイズ法) の結果—

標準化偏回帰係数	
従属変数 小説	
単純な説明選好	-.20 a $R^2 = .04$ a
従属変数 特殊マンガ・コミック	
帰属動機づけの欠如	-.13 c $R^2 = .02$ c
従属変数 実用書	
単純な説明選好	-.18 b
複雑な説明選好	.11 c $R^2 = .05$ a
従属変数 マニュアル	
複雑な説明選好	.20 a $R^2 = .04$ a
従属変数 人文書	
帰属動機づけの欠如	-.23 a $R^2 = .05$ a

N = 334

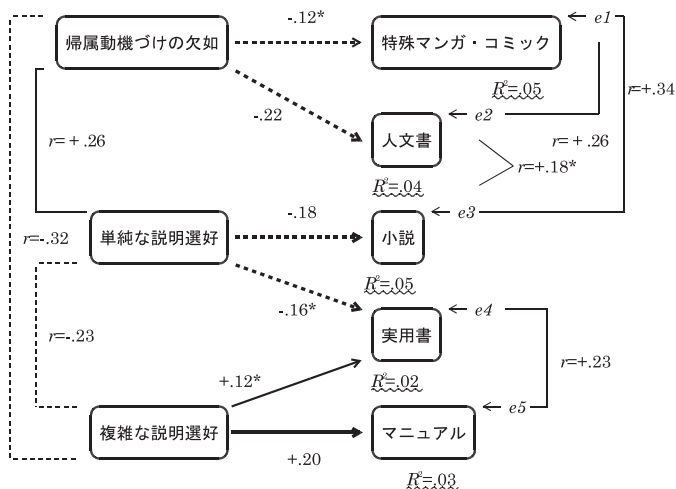
説明変数: 複雑な説明選好 帰属動機づけの欠如

単純な説明選好

ステップワイズ法: 投入基準 $p < .05$;

除去基準 $p > .10$

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$



e 1~e 5: 誤差項

矢印: 標準化パス係数 [有意水準: $*p < .05$; 他はすべて $p < .001$]

[モデル適合度] $\chi^2_{(15)} = 30.39, p = .011$; $GFI = .98, AGFI = .95, RMSEA = .06$

Fig. 1 書籍接触傾向におよぼす帰属複雑性の影響

—観測変数の構造方程式 (Amos 7.0, 最尤推定法) による因果分析 (N = 334) —

た。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終モデルを得た (Fig. 1)。

IV. 考察

本研究の主目的は、女子大学生を対象として書籍に対する接触パターンを抽出し、Fletcher *et al.* (1986) による帰属複雑性との関連を検討することであった。

書籍接触については主成分分析によって7主成分が得られ(「一般マンガ・コミック」, 「小説」, 「情報誌」, 「特殊マンガ・コミック」, 「実用書」, 「マニュアル」, 「人文書」), 2次主成分分析により物語性のある書籍と実生活で直接役立つ書籍の2次主成分を認めることができた。さらに、共分散構造分析は、回答者の帰属複雑性における個人差が書籍に対する接触パターンに影響することを示した。

興味深いことに、小説や専門書などの他に、実用書やマニュアルなどにも帰属複雑性の影響が認められた。これは、実用書やマニュアルなども枠組みや筋書きに一定の複雑さがあり、理解のために帰属志向性の高さが必要とされることを示唆する。しかしながら、書籍接触に対する帰属複雑性の3側面(「複雑な説明選好」, 「帰属動機づけの欠如」, 「単純な説明選好」)の弁別的影響に関する解釈は曖昧である。Fletcher *et al.* (1986) の研究では、帰属複雑性尺度は先述した7側面を表す項目から構成されているが、単次元尺度として扱われている。本研究で得られた3側面のうち、帰属動機づけの欠如はFletcher *et al.* が仮定した単一の側面を表す項目から成るが、他の2側面は元々仮定された側面の混在といえる。したがって、帰属複雑性の下位概念のより精緻な検討が今後必要とされる。

読書行動を支える認知的メカニズムの解明を意図した本研究では傾性的特徴としての帰属の働きの焦点をあてた。井関・海保(2001)は、知識を獲得するために読みを促進する手続きを読み方略とし、次の認知的方略の測定を試みた。①メタ認知方略(プランニング方略, モニタリング方略), ②テキスト情報取り込み方略(ドキュメント作法利用方略, 選択的注意方略), ③精緻化方略(命題理解方略, 内容理解方略, 知識形成方略)。本研究のように読書行動を当該書籍を読んだかという行動遂行の結果にのみ注目するのではなく、読書行動を一連の認知的過程として捉える観点も重要であろう。

読書行動の歴史-文化的分析を試みたChartier(1992)によれば、①時・所・集団によってその様態や

形式が異なる過程、つまりは歴史的に決定される過程や、②当該テキストが読み手による受容形態の重要性を説いた。例えば、これらの観点は、わが国の若者におけるライトノベルの趨勢の解釈とうまく関連する。ライトノベルとは、表紙や頁々に「マンガ的・アニメ的なイラスト」が添付された、10代若者層を主要読者とする「エンターテインメント小説」であり(一柳・久米, 2009)、流行の背景にわが国の'90年代のバブル経済の崩壊と冷戦の終結に伴う「自由だが冷たい(わかりにくい)社会」への直面に起因すると考えられる(宇野, 2008)。つまり、Chartierのいう歴史性と受容形態の枠組みからライトノベルは分析できる。読書行動の理解には、Chartierの観点も有益であろう。

ところで、わが国における読書心理学の構築を目指した阪本(1971)は、重要な研究領域として正常な読書行動が営めない読書欠陥者の診断と治療の研究を挙げた。阪本によれば、読書教育の目標は、「自分の生活における必要を読書によって適当で十分に充足する人格」である。先述した「国民読書年に関する決議」でも指摘されている「活字離れ」や「読書離れ」には阪本が言及している読書によって育まれる良好な人格の仮定が内在している。しかしながら、Chartier(1992)による歴史-文化的枠組みからは一概に読書行動と人格形成と結びつけることはできないからである。

以上に述べたように、読書行動を支える認知的メカニズムの解明をより精緻に行うとともに、分析の歴史-文化的枠組みの導入にも留意すべきであろう。

〈付記〉

- (1) 本研究は、第1著者の力久由香里(生活科学研究科生活デザイン専攻1年)が第2著者の下で卒業研究(同志社女子大学・生活科学部人間生活学科2010年度)のために収集したデータに追加データを加えた分析に基づいている。
- (2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 19.0.0.1 for Windows および Amos 7.0 利用した。

V. 引用文献

- 秋田喜代美 1997 『読書の発達過程-読書に関わる認知的要因・社会的要因の心理学的検討-』風間書房
- Chartier, R. 1992 福井憲彦(訳)『読書の文化史-テキスト・書物・読解-』新曜社
- Fletcher, G. J. O., Danilovics, P., Fernandez, G., Peterson,

- D., & Reeder, G. D. 1986 Attributional Complexity: An individual differences measure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 875-884.
- Heider F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. John Wiley & Sons, Inc. 大橋正夫訳『対人関係の心理学』1978 誠信書房
- 一柳廣孝・久米依子(編) 2009 『ライトノベル研究序説』青弓社
- 井関龍太・海保博之 2001 読み方略についての包括的尺度の作成とその有効性の吟味 *読書科学* **45** (1), 1-9.
- 毎日新聞社 2011 『2011年版読書世論調査-第64回読書世論調査/第56回学校読書調査-』毎日新聞社
- 諸井克英 2000 人は出来事の原因をどのように帰属するか? -帰属複雑性尺度の検討- 人文論集 **51**(1), 1-25.
- 阪本一郎 1971 『現代の読書心理学』金子書房
- 豊田秀樹 1998 『共分散構造分析入門 [入門編]-構造方程式モデリング-』朝倉書店
- 宇野常寛 2008 『ゼロ年代の想像力』早川書房
- 全国出版協会・出版科学研究所 2011 『2011年版出版指標年報』社団法人全国出版協会・出版科学研究所
- (2011年11月9日受理)

Appendix 1 書籍接触傾向尺度における残余項目

-
- book_a_5 オピニオン雑誌(社会・政治・ビジネス関係を含む;『正論』,『文藝春秋』など)
- book_a_8 職業・業界マンガ・コミック(単行本)
- book_b_1 地図・旅行に関する本
- book_b_3 女性ファッション雑誌(ビューティー・コスメを含む;『ViVi』,『JJ』など)
- book_b_8 エンターテインメントに関する本(音楽・映画など)
- book_b_10 マタニティ・育児雑誌(『たまごクラブ』,『げんき』など)
- book_c_1 旅行・レジャー情報雑誌(エリア情報を含む;『関西ウォーカー』,『びあ』など)
- book_c_4 法律・司法に関する専門書
- book_c_5 タレント写真集
- book_c_6 男性ファッション雑誌(『スマート』,『メンズノンノ』など)
- book_c_7 ブライダル情報雑誌(『ゼクシィ』,『けっこんびあ』など)
- book_c_8 文芸・歴史雑誌(『文藝』,『歴史群像』,『本の旅人』など)
- book_d_1 福祉・介護・社会保障に関する専門書
- book_d_2 児童書・絵本
- book_d_5 ゲーム・アニメ情報雑誌(『週刊ファミ通』,『アニメメディア』など)
- book_d_7 時代・歴史小説
- book_d_8 医学に関する専門書
- book_d_10 モノ・トレンド雑誌(『日経トレンドィ』,『mono マガジン』など)
- book_e_4 エッセイ小説(単行本)
- book_e_6 図鑑
- book_e_7 スポーツ雑誌(『スポーツ・グラフィック ナンバー』,『週刊サッカーダイジェスト』など)
- book_e_8 自然・動物系マンガ・コミック(単行本)
- book_e_9 詩歌集
- book_f_1 パソコン・コンピュータ雑誌(『日経パソコン』,『PCfan』など)
- book_f_4 自然科学に関する専門書
- book_f_6 ミステリー・サスペンスマンガ・コミック(単行本)
- book_f_8 科学技術・工学に関する専門書
- book_f_9 男性向けマンガ雑誌(『モーニング』,『週刊ヤングジャンプ』など)
- book_g_3 言語・語学に関する専門書
-